

看護エッセイ

2004年から連載された看護師のエッセイが、50編を超えました。
看護の心が、さまざまなテーマで描かれています。



Vol. 7

子ども達の命に輝きを

病気や障がいを持ったお子さんやご家族と共に
看護の可能性はどんどん広がっています。



障害をもった子どもと家族と共に

済生会横浜市東部病院準備室

小児看護専門看護師 渡辺 慶子



私が障害児看護に携わるようになったきっかけは、学部学生の頃にダウン症の女の子とそのお父さんとの出会いからです。今から思うと女の子は、小学校高学年の年齢ぐらいだったと思うのですが、簡単な会話が成り立つ程度の発達の遅れがありました。食事を自立して摂る事はできましたが、ナイフを上手く使うことができず、こぼしたり口の周りを汚したりしていました。ふとお父さんを見ると、お父さんの表情は優しさに満ちていました。楽しそうに笑っている女の子が愛おしくてたまらないお父さんの笑顔でした。女の子は私に興味をもってくれて、テーブルに着く時も、歩く時もそばを離れませんでした。私がその時感じた幸福感は何とも表現のしようのない温かいものだったことを、15年以上も前になる出来事ですが、今でも覚えています。そして、障害をもった子どもと家族の支援ができたらいいな、と漠然と思うようになっていきました。

障害をもった子どもと家族の支援に携わるようになって、私がいつも思うことは、「支えられているのは、支援をしたいと言っている私の方だな」ということです。障害児の療育施設で看護師として多くの子どもと家族に出会いました。病棟・外来・訪問看護と様々な場面で出会った子どもとお母さんやお父さんから、たくさんのパワーをもらっているような気がします。言葉の表現はなくても筋緊張を使って体で気持ちを伝えてくる子どもや呼吸器を装着しながら養護学校に通学する子ども、呼吸が苦しい子どもの「ごほっ」と一つ咳をただけでも夜中に起きて吸引するお母さん、お仕事の合間をぬって子どもの外来

受診に来院するお父さん、貧血で倒れそうなのに子どもは預けないで家庭で介護をしているお母さん、夜勤明けで寝不足な目をしていても子どもの入浴介護を手伝ってくれるお父さん…挙げたらキリがないくらい一生懸命なお父さん・お母さんの姿に尊敬し、障害をもってつらい体験をしながらも精一杯生きようとする子ども達の姿に感動しています。看護師ができる支援は、生活の中のほんの一部です。それでも、私がお母さんの話を聞いたり、子どものケアをしたことで、子どもが元気に明るく笑ったり、お母さんの表情が明るくなったのを見ると、明日も頑張ろうという思いになります。もちろん、楽しいことだけではありません。突然の悲しい別れが訪れることもあります。「最近はずいぶん調子が良くて、口から食事もとれるようになってきた」と喜んでいた1歳のひろくんは、冬の初めの朝に天国へ旅たちました。何も力になれなかった私は、無力感を感じていました。でも、お母さんとお父さんは、「ひろくんからたくさんの幸せをもらったし、たくさんの人と出会わせてくれた」と泣きながら話してくれました。ひろくんから教えてもらったことを生かしたいと、お母さんはヘルパーさんの仕事を始めました。ひろくんは重い障害をもっていて、身体的には辛い状態だったかもしれません。お父さんもお母さんも、介護に追われる毎日でした。でも、ひろくんはたくさんの愛情に包まれていたし、お父さんもお母さんもひろくんから愛を感じていました。だから、ひろくんが亡くなった後も、幸せに生きていきたいと思ってくれたのだと思っています。逆に聞こえるかもしれませんが、ひろくんとの別れが今も私が頑張りたいと思う出来事であったように思います。

2004年に日本看護協会による小児看護専門看護師の認定を受けてから、外来や訪問看護の場で活動し、今は、新しい病院を作り上げる準備をしています。世の中の流れは、病院や施設で医療を受ける仕組みから、在宅で医療を受け療養するような仕組みになってきています。障害をもった子どもを取り巻く医療環境も例外ではありません。しかし、高齢者の在宅支援体制が進む一方で、子どもへの支援はまだ未整備な部分も多いです。そのような中だからこそ、障害をもった子どもが安心して在宅療養生活を送れるようにするための、後方支援ができる施設や病院の機能が重要ではないかと思っています。在宅に呼吸器をもって帰るような重症な子ども達も増えています。その中のお母さんの一人に「看護師さんに一緒に頑張ろう」と言ってもらえた一言で「一人で頑張らなくていいんだ、と思ったらすごくラクになったのよ」と話してもらったことがあります。そんなお母さんの一言にやっぱり私は支えてもらっているんだという思いになりました。その一方で、障害をもった子どもと家族の生活をより良くしていくために、子どもに関わる様々な職種が連携し、協働していかなければ、支援は行き届かないと感じ、支援をしていきたいとも思っています。そして、その様々な人たちと子どもと家族の架け橋となれるように、今日も新しい病院の構想を練っています。



『看護外来』の可能性
～外来看護師が関わる在宅療養指導の取り組み～
神奈川県立こども医療センター 小児看護専門看護師 萩原 綾子

皆さんは、【在宅療養指導料】を知っていますか？

外来における診療報酬で、一定の条件を満たした患者に対して月1回に限り、保健師又は看護師が、プライバシーの配慮された場所で、個別に、30分以上、療養上の指導を行った場合に算定できるものです。1回170点(1700円)と少額ではありますが、外来で看護師が在宅療養指導を実施した場合にのみ算定される、画期的な診療報酬だと思います。私は、大学院の小児看護専門看護師のコースで学んでいるときに、【在宅療養指導料】を知り、「これだ!」と思いました。看護に対するOUTCOMEが重要だといわれていますが、その中で収益として看護が独自で出せるものは多くありません。外来での看護師の役割の重要性を語る上で、在宅療養指導料はOUTCOMEが出せる数少ないものです。

大学院を修了して、もう6年が経とうとしています。私は今、神奈川県の小児専門病院の外来で小児看護専門看護師として働いています。昨年1月に病院が新しい建物になり、看護体制も変わりました。そして外来では、『看護外来』のシステムを立ち上げました。これは、外来の看護師ひとりひとりが、自主的に在宅療養指導に関わる、というシステムです。

現在は、たくさんの病気や障害をもった子どもたちが地域で家族と生活しています。子どもたちは、気管切開をして吸引が必要であっても、人工呼吸器をつけていても、排泄に障害があっても導尿していても、口から食べることができずに注入が必要であっても、自分ひとりで動くことが困難であっても、地域で家族やきょうだいと一緒に生活しながら、友達と一緒に幼稚園や学校で勉強したり、遊んだりしたいのです。在宅療養指導というと、医療的な処置やケアに関する指導をイメージしがちですが、本当に必要なのは、何らかの医療的ケアを生涯にわたって継続しなくてはならない子どもや家族が、成長発達するなかで遭遇する出来事について、共に考え支援することです。

私たちの病院では、耳鼻咽喉科で従来実施していた「気管切開外来」に看護外来のシステムを加えてリニューアルしました。担当の看護師が診察の前後に子どもや家族と話しながら、生活の中で困っていることはないか、これから準備することはないかなどについて、情報を収集し、診察などの中で課題を解決できるように子どもや家族に寄り添っています。ゆっくりと子どもや家族に寄り添っていると、いろいろな相談を受けます。「気管切開を

して小学校にはいったら、吸引はどうしたらよいのか」「プールの授業は参加できるのか」「カニューレが学校で抜けてしまったらどうしたら良いのか」「友達に気管切開について質問されたらなんて答えたらよいのか」などなど。。。皆さんならどのように答えますか？小児専門病院のベテラン看護師であっても、う〜〜〜ん、と首をひねる質問ばかり。すぐに答えが出なくても、気管切開外来の看護師は医師などの他職種とも協働し、チームで勉強会やカンファレンスを行ないながら、知識と経験をフル稼働して「技~アート~」と呼べるような助言に、たどり着きます。「看護師さんが一緒に考えてくれて本当によかった」という子どもや家族の笑顔を見れば、苦労もスーッと薄らぐ気がします。

在院日数が短縮化し、家庭で継続することができる医療的ケアが増加する中、これから、看護師の在宅療養の看護の可能性はどんどん広がってゆくと考えます。『看護外来』は今日も少し発展しながら、在宅療養指導の可能性を拡大しています。





子どもの大いなる可能性と力を信じて

養護教諭・看護師 留目 宏美

私が多感な思春期の頃。同世代の少年少女が様々な事件の被害者のみならず、加害者となっていることに大きな衝撃を受けた。それが、進路を決断する上での大きなきっかけとなった。

「人間を人間たらしめるもの、それこそが教育である」

教育とは何か。私は、学生時代から教育のあるべき姿を常に考え続けてきた。

社会人一年目。念願叶い、公立高校保健室での勤務。学生時代と異なり、今度は実践あるのみと意気込んだ。そして、十人十色の生徒たちと向き合った。

例えば、怖いものなんか何もないと言わんばかりに、大人や社会に対して敵意をむき出しにする A 君。感情をコントロールする力が未熟で攻撃性が強く、他罰的な言動ばかりが先に立つ。当初、保健室にやってくるのは怪我をした時だけ。擦り傷、切り傷、打撲、骨折、火傷など、A 君にとって身体中の傷は強さの証のようだ。「どうしたの？」何を聞いても無言。口を開けば「は？」の一点張りで、怪我の手当てすら拒む。その上、保健室内の物に当たったり、堂々とタバコを吸おうとする。規律やルールを教えたくて叱り、彼の感情を余計に高ぶらせることもあった。でも、怪我をしたら、ちゃんと保健室に来てくれる律儀な一面を持っていた。常に何かに苛立ち、強がっている A 君の心の声が聞きたくて、こちらも必死だった。

思春期真っ只中にある子どもたちは、もがき、壁にぶつかりながら、自分探しをしている。A 君のように、感情や行動を外に向ける場合、問題とされる行動は表面化しやすく着目しやすいが、問題は決して単純ではない。思春期特有の反抗期と一言で片付けられない生徒の一人であった。

学校教育の成果は必ずしも即時的に現れ、明確な指標によって評価できるものばかりではない。特に、“生きる力”や“心の成長”などは、学力試験のように一律にはかることなどできない。だからこそ、一人ひとりの子どもの大いなる可能性と秘めたる力を信じて、子どもたち一人ひとりの成長の芽、伸びようとする力を焦らずゆっくり見守っていかなければならないと思う。教育に特効薬はない。確かなことは、人間対人間の営みの中で生まれ、支えられるということではないだろうか。

その後の長い経過の中で、A君にとっての保健室は、用事がなくても何となく来る場所になった。文句を言いながらも、ふとん干しや洗濯を手伝わされる場所になった。苛立ちをぐっと堪える場所になった。自分を語り、振り返る場所になった。身近な人のこと、将来のことまで語る場所になった。そして、A君が担任教師のことを「俺を見捨てない大人」と形容し、信頼の気持ちを素直に表現したとき、私は、人間のたくましさに圧倒された。

大人そして社会全体の教育力が試されている。そう強く感じるのは私だけだろうか。

重症心身障害児施設で学んだこと

看護師 眞鍋 裕紀子



私はこの大学に来るまでは、身体的、知的に重い障害を持つ子ども達と関わっていた。子ども達とかかわり始めて10年。その後も障害を持つ子ども達は、私にとって離れられない存在となった。

看護大学を卒業して就職した時には、小児看護に携わりたい、と願ってはいたが、障害児とは夢にも思っていなかった。

同期の友達も、少なくとも第3希望までの配属先であった中、私の配属先は第5希望にも入っていない重症心身障害児施設であった。後から聞いた話だが、私は卒業論文のテーマに、学生時代のボランティアからのつながりもあり障害児とその家族に関するものを選んでいたので、そのことが影響していたらしい。

なぜ重症心身障害児施設に？という思いと、やはりそうか、と言う思いも混在していた。配属先が決まってから、それぞれの場所へ挨拶に行った時、とにかく明るい、活気に満ちた場所だった。プレールームでスタッフ達が子ども達を抱き上げていたり、膝に乗せていたりして、スタッフの笑顔が飛び込んできた。

そして子ども達は、スタッフに支えられてこちらを向き、きよんとした表情や、満面の笑顔で迎えてくれた。しかし同時に子ども達の姿を目の前にして、自分に続けることができるのだろうか、言葉を話せない子ども達とどのようにかかわれば良いのか、と不安と恐怖が混ざったような気持ちになっていた。

しかし、いやおうにも日々の仕事を覚え、子ども達の事を勉強して、子ども達とかかわっているうちに、自分の気持ちに変化していくことに気付いた。

子ども達の何物にも変えられない目の輝き、心の純粹さ。

この子ども達にかかわってられる自分に感謝するようになっていった。
子ども達の障害はとても重く、ちょっとした風邪が重症になり、命取りになることもある。

また、私達が思うちょっとした環境の変化、ちょっとした遠出が、子ども達にとっては重労働になる。子ども達の健康状態はあまり変わらないように見えているが、重症でぎりぎりの状態で過ごしていると言っても過言ではない。

保育に積極的に参加していた子どもが、その日の夜に急変してその日のうちに亡くなった、ということも何度かあった。なぜこの小さな子ども達ばかりが、日々痛みや苦しみを受けていて、それほど人生の楽しみを味わわないうちに終わらなければいけないのか、私はそんな中で何をしているのか、と看護がいやになることが何度あったことか。そんな時、ある人が語った言葉を忘れない。「子ども達の姿を見てごらん。

いつも寝たきり、と言うかもしれないけど天使の姿と一番似ているのでは？あの子達は一番天使に近い存在。あの子ども達は使命を持ってきた子ども達で、徳のある命をもった子ども達。

だからこの世でその使命を果たして、さらに命を輝かしていくんだよ。」私が、落ち込みながらも気持ちを切り替えて（いたつもりだが）子ども達の所へ行くと、いつも私の気持ちを読み取ったのか、私を励ますように、思いやるようにじっと見る子ども達。その子ども達に日々支えられてきた。本当に純粹で一番わかっている、と言う言葉が最もふさわしい子ども達であると思う。

すぐに重症化してしまう、命の危険性を常に持っている子ども達。

しかし子ども達は日々大切な命を生きているのである。

ちょっとした一瞬先の子ども達の命がわからないだけに、その一瞬の時間を大切にしなければならない。その子ども達の一瞬一瞬の命を輝かせていくために私は何を出来るのだろうか。

少なくとも、その子ども達と出会えたこと、子ども達から学んだこと、を1人でも多くの人々に伝えていくことが出来たら、と思っている。



